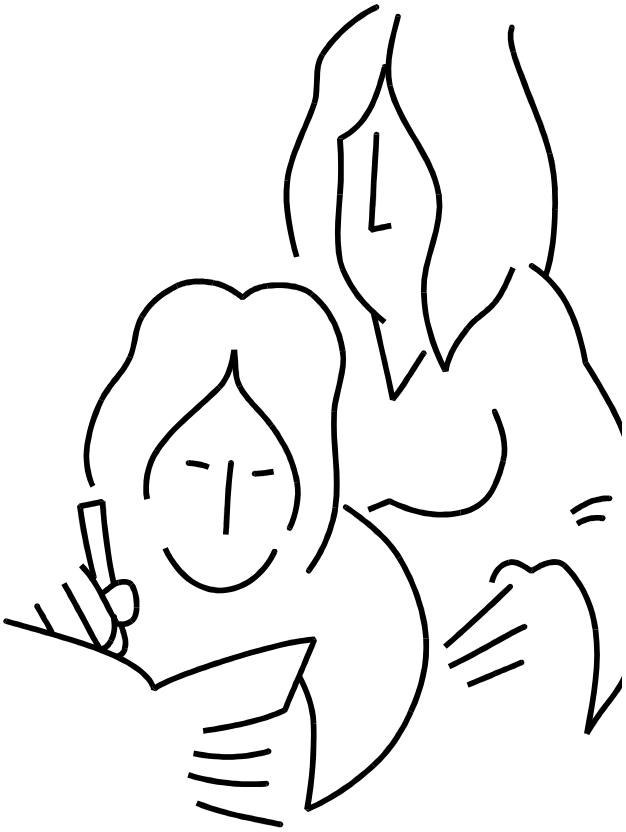
# トラブル　その一

松本康子

「私たちは日本人だから、アメリカ人のルールは知りません」ではすまされない。

みなさんは、長い子どもの夏休みが終わり、ほっとされている時期だろうか。それとも、アメリカという国で、新しく学校生活をスタートされるお子さんを、心配ながらも送り出されただろうか。どちらにしても、子どもの学校生活の毎日は、アメリカでの生活が長い短いに関係なく、何かしら新しいカルチャーに出会う中での、サバイバルゲームになっているのではないだろうか。私の子どもたちが経験したトラブルを通して、「大人が考える以上に、子どもの頭の中は空白状態なのかもしれない」と、今になってそう考えられる。今回はそのトラブルの一つを紹介したい。



子ども達がやっと学校へ戻ってくれたと、私が少し気を抜いた頃に、学校から小学校6年生の三女のことで電話がかかってきた。

「トラブルがあったので、校長先生のところへ来てください」「お子さんが、ナイフを所持していたので…」。はじめは、「何事だろうか」と軽い調子で聞いていたが、その理由を知ったとたんに、「どうしちゃったの!」と、パニック状態になった。

「本当にうちの子どものこと?」「どうしてそんなことになったの?」という疑問と心配で、頭が一杯になってしまった。「ナイフ」などという言葉自体が、飛び出しナイフやジャック・ナイフといった武器としての悪いイメージがあり、三女のおっとりした性格からかけ離れていたのだ。学校から帰った娘に呼び出しの電話について「心当たりがある?」と聞いてみた。すると、何とも言えない心配顔をして、「ある」と一言。娘から事情を聞いてみると、なんと「えんぴつ削り」が「ナイフ」の正体だったのだ。

三女は、小学校3年生で初めて日本での体験入学を経験したが、そのとき学校で、「ひごのかみ」でえんぴつを削るのを教わった。それ以来、家でもカッターナイフでえんぴつを削るのが習慣となった。その習慣から、夏休みに使ったカッターを筆箱に入れたまま、数日間登校したと言う。娘の説明で、武器になるようなナイフを持っていたと言うならいざ知らず、どうしてカッターナイフのような物を持っていた事が、学校へ呼び出されるようなトラブルとなったのか、私は理解できなかった。

夫に相談すると、学校へ Dress Code Agreement（生徒規約）を提出したことと、つい最近読んだ Zero Tolerance の新聞記事を例に、「もしかすると、退学になるかもしれないな…」と、恐ろしいことを一言。私もそういうルールがあることを知ってはいても、実際にはどんなものなのかという内容までは、全くと言っていいほど知らなかった。夫は「退学」などと言ったが、私は内心、三女が Good Student の一人として表彰されたのを頼みに、校長先生の温情に訴えてでも、何とか娘のトラブルはなかった事にしてもらおうと、大げさだがそんな心境だった。

娘共々、すっかりしょげてしまった私たちを連れて、夫が一緒に校長先生に会いに行ってくれた。ところが、娘の顔を見るなり、先生はニコニコしながら「3日間の停学なんだけど…。い